

演題13

待合室における保護者の思考様式について

○角田まり子、下飛田道子、椿山園美、
福重真理子、久我裕子、山口昭一、
井本恵、堂園由美
オクト・ピド・グループ・福岡市

小児歯科専門医を受診するにあたり、患児である子供を連れてくる母親に治療方針や内容を理解してもらうことは大切である。その母親が次回も子供を連れてこようと思うには、治療に関する理解もさることながら、待合室でいかに快適に待つことが出来るかも重要な要素だと思われる。待合室の環境面においては、各病院により様々な工夫がされているが、果たして母親は待合室で待っている間、何を考えているのだろうか。

そこで、今回、待合室で待っている母親に対してアンケート調査を行ない、母親が待合室でどのように時間をすごし、何を考えているのか、また、不安に思うことがあれば、その具体的な内容を明らかにしたいという目的でこの調査を行なった。

調査対象は、小児歯科専門医を訪れた来院患者の母親のうち、待合室で子供を待つ母親とした。アンケートは無記名で、母親を新患治療、定診治療の2つのグループに分け比較検討し、母親の思考における興味ある知見を得たので今回報告する。

演題14

幼児う蝕の発生に関する考察

○藤好ふみ子^{*}、吉良直子^{**}、川上恵子^{**}
榊 加代子^{**}

^{*}NTT病院 ^{**}熊本保健所 ^{**}北部保健センター

幼児う蝕の減少は、保健所歯科および小児歯科に携わる私達にとって、大きな課題です。乳歯のう蝕初発予防は母親に対して歯科指導・生活指導を行ない、その間接的な効果を期待しなくてはなりません。今回、私達は保健活動と治療の連動システムを確立するためのテスト資料として、保健所における幼児健診結果を分析・その発生について、幼児を取り巻く環境と生活習慣を調査したので報告します。

対象：平成4年4月から11月までに3歳児歯科健診を受診した788名のうち既往歴・心理に問題のない471名としました。

方法：妊婦健診から乳児健診・幼児健診までの記録が収められている母子管理票によりました。母親の妊娠時の状態(つわりの有無・口腔状態・職業の有無・家族形態)1歳6か月児健診時・3歳児健診時の生活習慣をう蝕の有無により2群に分け、各調査項目間においてう蝕の発生と量に関する要因分析を行ないました。

結果：環境要因においても有意差の認められた因子があり、中でも複合家族の罹患率が低い結果が得られました。当所で行なっている妊産婦健診の寄与率も比較的高く、歯科指導効果と推察されます。母親の口腔状況と幼児のう蝕の相関については、今後の指導に役立つ結果が得られました。

まとめ：8020運動の達成に向けて、胎児期からの歯科保健教育が必要です。その可能性があるのは妊婦健診であることが再認識されました。幼児う蝕の予防と早期治療のためには、歯科健診と歯科健康教育が効果的に実施される必要があります。今後の保健指導は集団指導中心から個人指導へも目を向けたものとすべきであり、小児歯科臨床との緊密な連携が不可欠です。地域単位で小児う蝕の予防を考えるシステムを健康教育を中心として、確立させていきたいと思えます。